The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	親の教育アスピレーションの規定要因におけるジェンダー差
Author(s)	金南, 咲季
Citation	大阪大学教育学年報. 2017, 22, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60445
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

親の教育アスピレーションの規定要因におけるジェンダー差

金　南　咲　季

要旨

親の教育アスピレーションは、社会階層に大きく規定されつつ、子どもの教育・地位達成に重要な影響を及ぼすため、階層再生産過程における重要な媒介変数であることが指摘されてきた。しかしこれまで、その規定要因のジェンダー差は十分に検討されていない。そこで本稿では、教育達成の階層化メカニズムの一端を明らかにすべく、親の教育アスピレーションの規定要因におけるジェンダー差を明らかにすることを目的とした。

男女別の重回帰分析の結果、親の教育アスピレーションは、男性では学歴という属性としての階層変数によって、女性ではどの程度「格差容認意識」を内面化させているかという、階層と結びついた意識変数によって規定される部分が大きいことが示された。また女性では、15歳時の家庭の文化・教育環境に恵まれていたことが正の効果をもっていた。

以上のジェンダー差がみられた理由については、労働市場原理や階層的秩序における位置付けや、子どもへの価値伝達者としての役割、子どもの教育達成に対する意味づけが男女によって異なっていることから説明を行った。

1. 問題の所在

本稿の目的は、親の教育アスピレーションの規定要因におけるジェンダー差を明らかにすることで、教育達成の階層化メカニズムの一端を明らかにすることである。

1990年代以降の新自由主義的趨勢に伴う教育の市場化・私事化は、教育の社会階層間格差というテーマに注目を促してきた。なかでも本稿で着目するのは、格差の拡大や階層的地位の再生産に寄与する一因として、地位達成研究や社会移動研究において重要な研究対象として位置づけられてきた「教育アスピレーション」である。

社会学において「アスピレーション」とは、「社会的諸資源を具体的な目標とした達成要求」（中山・小島，1979）のことであり、その下位類型のひとつにあたる教育アスピレーションは、個人の教育達成に対する希望や意欲を示す指標として捉えられる（三輪・苫米地，2011）。教育アスピレーションに関する研究は、日本ではこれまで主に高校生の教育アスピレーションの規定要因を明らかにするものを中心に蓄積が進められてきた（樋田他編，2000；尾嶋編，2001；片瀬，2005など）。しかしそれらの多くにおいては、親の職業・学歴・収入といった家族・家庭背景に関する要因が、高校生個人の属性の一つとして分析されるにとどまり、家族との関わりを考慮した上でいかなるメカニズムを通じて子どもの教育達成に影響を与えているのかについては十分に検討が行われてこなかった（直井，2002）。子どもの教育アスピレーションの形成や教育達成には、親の教育期待の影響が大きいことが指摘されていることからも（宮寺, 2006；Sewell et al., 1970など）、

今後は地位達成の理論の発展に向けて、高校生だけでなく親の教育アスピレーションの規定要因を明らかにしていく研究が求められている[1]（片瀬・土場，1994；片瀬，2005；藤原，2009）。

「親の教育アスピレーション」は先の定義に沿って、子どもの教育達成に対する親の希望や意欲として捉えられる。それは教育投資や子どもとの接し方に影響を与え、子ども自身のアスピレーションや成績、延いては最終的な教育・地位達成にも重要な影響を及ぼすことが明らかにされてきた（Sewell et al., 1970；片瀬，2005；荒牧，2011など）。また、この「親の教育アスピレーション」の規定要因については、これまで社会経済的地位との関連からの検討が盛んに行われ、両者に強い結びつきがみられることが指摘されてきている（中井，1991；柴野ほか，1999；本田（沖津），1998；中村，2000；吉川，2000；2006；藤原，2009など）。

しかし、その規定要因の検討にあたっては、ジェンダー差への着目が十分になされてきていないことが課題として挙げられる（片瀬，2005：75）。高校生本人の教育アスピレーションの規定要因についてはジェンダー差の検討が徐々に進められつつあるものの（片瀬，2005；相澤，2008など）、親の教育アスピレーションの規定要因については正面から主題として扱った研究はほとんどみられない。依然として男女によって労働市場原理への埋め込まれ方や子育てにおける役割などに大きな違いがみられる今日的状況を踏まえれば、教育アスピレーションの規定要因にジェンダー差が確認される可能性は高く、今後はこうした観点からより詳細な分析を行っていくことが必要であると考えられる。

以上を踏まえて本稿では、親の教育アスピレーションの規定要因におけるジェンダー差を明らかにすることを目的とする。本稿の構成は以下のとおりである。まず次節で先行研究と本稿の着眼点について概観した後、3節でデータと分析方法について確認する。続く4節で分析結果を提示し、最終節でそれらの結果を踏まえて考察と今後の課題について論じる。

2. 先行研究

親の教育アスピレーション・教育意識の規定要因について、ジェンダー差に着目して検討を行った研究の蓄積は少ないが、その先駆的なものとして本田（沖津）（1998）の研究が挙げられる。そこでは、「子どもにはできるだけ高い教育を受けさせるほうがよい」という変数を従属変数に用いて、教育意識の規定要因についてコーホート別、さらに男女別に検討が行われている。本田（沖津）は、男性と女性では家族、教育、職業社会という3つのシステムの関係構造における位置付けが異なっていること、また子どもの教育達成に及ぼす女性＝妻＝母の影響力が増大傾向にあることを踏まえて、女性の教育意識の規定要因が男性とどのように異なるのかを明らかにすることを中心課題の一つに据えている。分析の結果、男性の場合は、本人の学歴や職業が教育意識に大きく反映され、その格差は後のコーホートほど明確化していることが示されている。一方、女性の場合では、本人の学歴や職業などの高低が教育意識に反映される度合いはそれほど大きくなく、夫の学歴や、自分の母や夫の学歴と自分の学歴とのギャップなどの家族内変数によって影響を受けていることが指摘されている。すなわち、男性では子どもに対する教育意識が属性的な階層要因によってハードに規定されているのに対して、女性ではその度合いは小さく、代わって家族の社会経済的地位を自らの意識に内面化するかたちで、教育意識を形成している傾向がみられるという。

本田（沖津）の研究は、男女の社会的な位置付けや役割の違いを考慮に入れた上で、教育意識の規定要因のジェンダー差を明らかにしており多くの示唆に富む。しかし、その規定要因の検討にあたっては、父母・本人・配偶者の教育年数、本人・配偶者の現職スコア、中3時の成績、出生年という主に属性としての階層変数と本人の学力の影響を分析するにとどまっている。本田（沖津）自身も指摘しているように、現代社会

において男性は市場原理や階層的秩序に埋め込まれた状態であるのに対して、女性はその就労形態や社会的地位からみても同様の状態にあるとは言いがたい。またこのことと関連して、子どもの教育達成に対して、男性では学歴や職業などのハードな側面が、女性では意識というよりソフトな側面が影響を与えているという傾向の違いが示唆されている。これらを踏まえると、男性では属性としての階層が、女性では階層と結びついた意識が、教育アスピレーションを規定する度合いが大きいことが推測される。ゆえに今後は、属性としての階層変数だけでなく、階層と結びついた意識変数をモデルに加えた分析へと展開していく余地があると考えられる。

そこで本稿では分析にあたり、教育アスピレーションの主な規定要因とされてきた学歴、収入、職業的地位といった階層的要因に加えて、それらと密接に結びついた意識の一つである「格差容認意識」に着目する。格差容認意識とは、格差是正に対する消極的態度と自由競争の推進を基盤に、新自由主義的な政策意見を支持する意識として捉えられる。それは社会のマジョリティ側に位置づけられている人ほど支持する傾向の強い、階層と強く結びついた意識である（吉川，2014：178）。男性と比べて、職業社会からは依然距離のある女性は、属性としての階層変数よりも、階層と結びついた格差容認意識が教育アスピレーションを規定する度合いが高いと考えられる。

こうした傾向を示唆する知見として片岡（2009）の研究が挙げられる。片岡は、私立中学校の受験家庭あるいは受験希望の家庭の親の特徴の分析を通じて、競争主義的な意識と子どもに対する教育アスピレーションとの関連に言及している。そこでは、受験を選ぶ親（＝教育アスピレーションの高い親の典型）は、自らが競争的ハビトゥスを持ち、子どもにも社会的な成功を望むがゆえに、「良い学校、いい会社」という近代的な上昇的価値志向を子どもに伝達していることが指摘されている。ただしその際、父親・母親ともに高い競争的ハビトゥスをもってはいるが、子どもへの価値伝達を行っているのは主として母親であるという。また、ゆえに子どもが中学受験をするか否かは主に母親側の要因に規定される側面が強くみられるが、こうした子どもの高い教育達成のための投資は、とりわけ高学歴専業主婦の母親のアイデンティティをかけた競争・教育戦略になっているとの知見も提示されている。

片岡の研究は、職業社会と子育てにおけるジェンダー分業のもと、子どもへの価値伝達者としての役割や、子育てと結びつけた自己のアイデンティティの構築に関して父親と母親の間には違いがみられ、ゆえに競争主義的意識が教育アスピレーションを規定する度合いにジェンダー差がみられることを示唆している。これらの知見より本稿の分析においても、競争的ハビトゥスと親和的であると考えられる「格差容認意識」の「親の教育アスピレーション」に対する効果は女性においてより大きくなることが推測される。

3. データと分析方法

本稿で用いるデータは、統計数理研究所と大阪大学の共同研究であり、「SSP（Stratification and Social Psychology）プロジェクトによる格差と社会意識についての全国調査（面接）」データ（SSP-I2010データ）である。この調査は、層化２段階抽出法によって選ばれた全国の25～59歳の男女を対象に、2010年12月から2011年４月にかけて訪問面接法によって実施されたものである。計画サンプル3500のうち、有効回収は1763（回収率50.37％）であった。

本稿で用いる変数の説明を表１に、各変数の記述統計量を男女別に表２、３に示す。本稿の分析では、「親の教育アスピレーション」（以下「教育アスピレーション」）を従属変数とし、その規定要因をジェンダー差に着目して明らかにするために、男女別にケースを分けて重回帰分析を行う。独立変数には、「年齢」「学歴

(教育年数)」「世帯年収（対数変換)」「現職の従業上の地位」「既婚」「子どもの有無」「15歳時の家庭の文化・教育環境」「格差容認意識」の８変数を用いる。

表１．使用する変数の説明

変数名	概要
親の教育アスピレーション	「子どもにはできるだけ高い教育を受けさせるのがよい」、「受験競争の経験は人生にとってプラスになる」、「子どもの塾や家庭教師などに生活を切りつめても出費するのは当然である」の３変数の主成分分析によって男女別に作成（表４，５）
性別	男性、女性
年齢	満年齢（25～60歳）
学歴	教育年数
世帯年収	対数変換
現職の従業上の地位	正規雇用＝「経営者・役員」「常時雇用されている一般従業者」 非正規雇用＝「臨時雇用・パート・アルバイト」、「派遣社員」、「契約社員・嘱託」 自営・家族従業＝「自営業主・自由業者」、「家族従業者」、「内職」 無職･学生＝「無職（仕事を探している)」、「無職（仕事を探していない)」、「学生」
既婚ダミー	既婚＝１　未婚＝０
子ども有ダミー	子ども有＝１　子どもの無＝０
15歳時の家庭の文化・教育環境	15歳時に家庭にあったものを聞いた項目のうち、「子ども部屋」「あなた自身の学習机」「ピアノ」「文学全集・図鑑」「美術品・骨董品」の５変数の主成分分析によって男女別に作成（表６，７）
格差容認意識	「チャンスが平等に与えられるなら、競争で貧富の差がついても仕方がない」、「競争の自由をまもるよりも格差をなくしていくことの方が大切だ」、「今後、日本で格差が広がってもかまわない」、「今の日本では収入の格差が大きすぎる」の４変数の主成分分析によって男女別に作成（表８，９）

表２．分析に用いた変数の記述等計量（男性）

変数名	平均値	標準偏差
親の教育アスピレーション	0.00	1.00
年齢	44.81	9.83
学歴（教育年数）	13.48	2.24
世帯収入（対数変換）	6.30	0.87
常時雇用（基準）	0.76	0.42
非正規雇用	0.07	0.25
自営・家族従業	0.10	0.30
無職・学生	0.07	0.25
既婚	0.76	0.43
子ども有	0.70	0.46
15歳時家庭の文化・教育環境	0.00	1.00
格差容認意識	0.00	1.00

N=658

表３．分析に用いた変数の記述等計量（女性）

変数名	平均値	標準偏差
親の教育アスピレーション	0.00	1.00
年齢	43.91	9.47
学歴（教育年数）	13.10	1.75
世帯収入（対数変換）	6.16	0.86
常時雇用（基準）	0.27	0.44
非正規雇用	0.33	0.47
自営・家族従業	0.10	0.30
無職・学生	0.30	0.46
既婚	0.80	0.40
子ども有	0.80	0.40
15歳時家庭の文化・教育環境	0.00	1.00
格差容認意識	0.00	1.00

N=793

「親の教育アスピレーション」、「15歳時の家庭の文化・教育環境」、「格差容認意識」については、それぞれ表１中に示した項目について男女別に主成分得点を算出して尺度化した（注２～４を参照)。「現職の従業上の地位」に関しては、「常時雇用」を基準カテゴリとして、ダミー変数「非正規雇用」、「自営・家族従業」「無職・学生」をモデルに投入する。

4. 分析結果

本節では、教育アスピレーションの規定要因にジェンダー差がみられるかどうかを検討していく。分析にあたっては先述のとおり、世帯収入や学歴といった属性としての階層変数と、格差容認意識という意識変数に着目して分析を行う。

また本稿では、同じSSP-I2010のデータを用いて格差容認意識の規定要因を分析している吉川の知見（2014：117）を踏襲する。吉川は、重回帰分析の結果、男性、若年、高階層の人ほど格差を容認しやすいことを明らかにしている。この結果より、格差容認意識は女性よりも男性に保有されやすいほか、社会階層の観点から言えば、高い地位に位置づく人々によって保有されやすい傾向があることが確認できる。

以上を踏まえたうえで、以下4.1で男性、4.2で女性の場合の、親の教育アスピレーションの規定要因についての重回帰分析の結果を確認していくことにしたい。

4.1　教育アスピレーションの規定要因（男性）

まず、男性について重回帰分析を行ったところ以下の結果が得られた（表10）。独立変数間の相関関係については、内部相関が0.5以上のものはみられず、多重共線性は確認されなかった。

表の結果より、モデル１においては、階層指標である学歴（本人教育年数）が最も大きな効果をもっており、回帰係数が0.069で0.1%水準で有意であることが示された。続いて効果がみられたのは満年齢で、回帰係数が0.013で１%水準で有意であった。また以上の２つの変数に比べて効果は弱いものの、標準化回帰係数の値から、子ども有ダミー、15歳時の家庭の文化・教育環境、世帯収入に正の効果、自営・家族従業に負の効果がみられ、それぞれ10%水準で有意な傾向が確認された。

次に格差容認意識を投入したモデル２についてみていく。表の結果のとおり、本稿の分析では、新たに投入した格差容認意識の教育アスピレーションに対する有意な効果は確認されず、調整済み決定係数についてもほとんど変化はみられなかった。また、モデル１からの変化としては、本人教育年数の標準化回帰係数の値が0.153から0.141に弱まったことが確認できる。このことより、本人教育年数が格差容認意識を媒介して教育アスピレーションを形成している傾向も示唆された。

表10. 教育アスピレーションの規定要因に関する重回帰分析の結果（男性）

		モデル１		モデル２	
	相関係数	B	*β*	B	*β*
（定数）		−2.176	***	−2.127	***
満年齢	.112 **	.013	.131 **	.014	.139 ***
本人教育年数	.180 ***	.069	.153 ***	.063	.141 ***
世帯収入（対数変換）	.153 ***	.090	.079 †	.088	.077 †
常時雇用（基準）					
非正規雇用	−.014	.074	.018	.084	.021
自営・家族従業	−.068 *	−.235	−.071 †	−.219	−.067 †
無職・学生	−.055 †	−.040	−.010	−.020	−.005
既婚	.112 **	−.068	−.029	−.061	−.026
子ども有	.135 ***	.230	.105 †	.219	.100 †
15歳時家庭の文化・教育環境	.119 ***	.082	.082 †	.077	.077 †
格差容認意識	.105 **			.063	.063
決定係数R２		.080		.084	
調整済み決定係数R２		.067		.070	

†：p<.10，*：p<0.05，**：p<0.01，***：p<0.001　　N=658

以上の結果より、男性においては学歴が高く年齢が高い人ほど、高い教育アスピレーションをもつ傾向がみられることが示された。また効果は弱いものの、「子どもが既にいる」、「15歳時の家庭の文化・教育環境が恵まれていた」、「世帯収入が高い」人ほど子どもへの教育アスピレーションを加熱する傾向、また常時雇用に比べて自営・家族従業で教育アスピレーションを冷却する傾向も示唆された。

4.2 教育アスピレーションの規定要因（女性）

次に、女性についても同変数を用いて重回帰分析を行ったところ、以下の結果が得られた（表11）。独立変数間の相関関係については、内部相関が0.5以上のものはみられず多重共線性は確認されなかった。

表11. 教育アスピレーションの規定要因に関する重回帰分析の結果（女性）

		モデル 1		モデル 2	
	相関係数	B	β	B	β
（定数）		−1.864	***	−1.640	***
満年齢	.068 *	.009	.084 *	.010	.095 **
本人教育年数	.115 ***	.057	.100 *	.051	.089 *
世帯収入（対数変換）	.108 ***	.074	.063 †	.042	.036
常時雇用（基準）					
非正規雇用	.043	.138	.065	.132	.062
自営・家族従業	−.034	−.082	−.025	−.084	−.025
無職・学生	.010	.069	.032	.061	.028
既婚	.082 **	.026	.010	.035	.014
子ども有	.104 **	.238	.096 *	.246	.099 *
15歳時家庭の文化・教育環境	.130 ***	.106	.106 **	.098	.098 *
格差容認意識	.195 ***			.180	.180 ***
決定係数R 2		.053		.084	
調整済み決定係数R 2		.042		.072	

†：p<.10, *：p<0.05, **：p<0.01, ***：p<0.001 N=793

まずモデル１において、15歳時の家庭の文化・教育環境の回帰係数は0.106で１％水準で有意であり、最も大きな効果をもっていることが示された。続いて、本人教育年数、子ども有ダミー、満年齢の順で効果がみられ、それぞれ５％水準で有意であった。また効果は弱いものの、世帯収入についても10%で有意な傾向がみられた。

次にモデル２の結果からは、新たに投入した格差容認意識が、回帰係数が0.180で0.1%水準で有意、且つ最も大きな効果をもっており、また調整済み決定係数を0.42から0.72へと大きく改善させていることが示された。またモデル１からの変化として、本人教育年数の標準化回帰係数の値が0.100から0.089に弱まったこと、15歳時の家庭の文化・教育環境の標準化回帰係数の値が0.106から0.098且つ有意水準が１％から５％に弱まったこと、そして世帯収入の10%水準での有意性が消失したことが確認された。このことより、女性においては、階層変数や15歳時の家庭の文化・教育環境が、格差容認意識を媒介して教育アスピレーションを形成していることが示唆された。

5. 考察と課題

以上の男性と女性の両結果を踏まえて、親の教育アスピレーションの規定要因のジェンダー差について結果を整理しておきたい。

まず、男女ともに年齢が有意に正の効果をもっていることから、年齢が高くなればなるほど子どもに対する教育アスピレーションを抱きやすい傾向が示された。このことは、分析結果において子ども有ダミーの正の効果も確認されていたことと併せて考えると、親の加齢とともに子どもの学校段階が進んでいくにつれて、受験や進路形成を視野に親が子どもの教育について考える度合いが増していくこととも関連していると考えられる[(5)]。

男性では、学歴（教育年数）が教育アスピレーションの規定要因として最も大きな効果をもっていることが示された。格差容認意識については有意な効果は確認されず、投入後も決定係数の変化はほとんどみられなかった。一方女性では、学歴（教育年数）はそれほど大きな効果をもっておらず、代わって格差容認意識が0.1%水準で最も大きな正の効果をもち決定係数も大きく高めることが示された。また男性に比べて女性では、15歳時の家庭の文化・教育環境が相対的に大きな効果をもっていることも確認された。

以上の結果より、本稿の主な知見として、親の教育アスピレーションは、男性では学歴という属性としての階層変数によって、女性ではどの程度、格差容認意識を内面化させているかによって規定される部分が大きく、ジェンダーによってその規定要因が大きく異なっていることが明らかとなった。

以上でみた親の教育アスピレーションの規定要因におけるジェンダー差は、第１に、現代の日本社会における労働市場原理や階層的秩序における男女の位置付けの違いから説明を試みることができる。すなわち、男性は市場原理や階層的秩序に埋め込まれたままで社会状況を把握し活動しようとする一方（吉川，2014）、女性ではそうした傾向は相対的に強いとは言えない状態にある。こうした違いのもとで、男性の場合は、属性としての階層変数と教育アスピレーションとが「分に応じた」かたちで対応する傾向が見られるのに対し、女性では男性と比べてより内的な態度や意識が効果をもつ傾向が示されたと考えられる。また先述のとおり、格差容認意識は男性において広く浸透した価値観である一方、女性ではそれを有することが男性に比べてより特異な特徴となる。そのため、男性に比べて女性ではその強弱が、教育アスピレーションを規定する重要な要因として現れやすくなっていたことも一因として考えられる。

第２に、ジェンダー分業のもと子育てにおいて中心的役割を果たす女性は、男性に比べて子どもへの価値伝達者としての主要な役割を担う傾向にあるため（片岡，2009）、我が子の教育に対する熱心さの度合いも父親に比べて高くなると考えられる。よって、女性にとって格差容認意識をもつことは、男性のようにそれを独立した意識として保有するにとどまらず、我が子を格差社会で生き残らせていこうという動機と、そのために子どもへの教育アスピレーションを高めていこうとする意識に結びつきやすくなると考えられる。またその点とあわせて、子どもの教育達成が母親自身にとって持つ意味が、父親にとってのそれとは質的に異なり得るという点も指摘できる。片岡（2009）は、子どもの教育達成は、高学歴専業主婦の自己のアイデンティティ構築をかけた競争であるといった知見を提示しているが、こうした点も踏まえると、女性において競争的価値に裏付けられた志向性を有することは、男性と比べて我が子への教育アスピレーションを高めることとより結びつきやすいと考えられる。

最後に、女性において15歳時の家庭の文化・教育環境の正の効果がみられたとの結果は、女性の向教育的価値観の背後には相続文化資本による文化的再生産のメカニズムが強く働いているとの指摘や、学歴の重要性を伝え文化資本を継承する主な役割を果たしているのは女性（母親）である、との先行研究の知見（片岡，1997など）とも整合的である。

以上、親の子どもに対する教育アスピレーションの規定要因と性別による構造の違いの一端を明らかにする本稿の知見は、教育達成の階層化メカニズムの把握に貢献するものだといえるが、ここでは最後に本稿の限界と今後の課題についても述べておきたい。本稿の分析では、従属変数として設定した「教育アスピレー

ション」と、独立変数の中で着目した「格差容認意識」はともに意識変数であるため、その因果関係までを明らかにすることは厳密にはできていない。したがって、将来的にはパネル分析を行うことで、結婚、出産などのライフイベント、そして格差容認意識の変化などが女性の教育アスピレーションを加熱させるのかどうかをより詳細に確認する必要があるといえる。また本稿では、親の教育アスピレーションの規定要因を検討する上で重要であると考えられる子どもの性別[(6)]や人数[(7)]、成績[(8)]などを加味した分析には至らなかった。今後は、これらの点も考慮に入れたより精緻な分析モデルを考えていくことを課題としたい。

〈付記〉

本研究はJSPS科研費16H02045の助成を受けて、SSPプロジェクト（http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/）の一環として行われたものである。SSP-I2010データの使用にあたってはSSPプロジェクトの許可を得た。記して感謝申し上げます。

〈注〉

(1) 藤原（2009）は、家庭・家族に関する要因は、母子の期待の相互依存関係を考慮すれば高校生の教育期待には影響を与えないが、母親の教育期待には独自の影響を与えていることを明らかにしており、高校生だけでなく、親の期待形成にも注目することが教育達成の階層化メカニズムを把握する上で有効であると指摘している。
(2)「親の教育アスピレーション」の主成分分析の男女別の結果は表4、5のとおりである。
(3)「15歳時の家庭の文化･教育環境」の主成分分析の男女別の結果は表6、7のとおりである。
(4)「格差容認意識」の主成分分析の男女別の結果は表8、9のとおりである。
(5) ここでは、親の加齢に伴い子どもの学校段階が進んでいくことから説明を試みたが、厳密には加齢効果からだけでなく、時代効果やコーホート効果からの説明も考えうる点に留意されたい。
(6) 親の教育期待は、女子の場合男子と比べて、子ども自身の能力よりも親の社会経済的地位が影響を与える傾向がみられると指摘されている（片瀬，2005）。
(7) 特に女子の場合、兄弟が増えると親の教育期待が冷却されることなどが指摘されている（片瀬，2005）。
(8) 親の教育期待は、親自身の社会的地位（学歴と職業）とともに、子どもの知的能力と学業成績を評価するなかで形成されていることが指摘されている（Sewell et al., 1970）。

表４．「親の教育アスピレーション」の尺度構成（男性）

変数	共通性	因子負荷量
子どもにはできるだけ高い教育を受けさせるのがよい	.567	.753
受験競争の経験は人生にとってプラスになる	.611	.782
子どもの塾や家庭教師などに生活を切り詰めても出費するのは当然である	.632	.795

	固有値	分散の％
第一主成分	1.810	60.3
第二主成分	.633	21.1
第三主成分	.557	18.6

（注）因子抽出法：主成分分析，N=658, Cronbach's α =.670

表５．「親の教育アスピレーション」の尺度構成（女性）

変数	共通性	因子負荷量
子どもにはできるだけ高い教育を受けさせるのがよい	.552	.743
受験競争の経験は人生にとってプラスになる	.512	.715
子どもの塾や家庭教師などに生活を切り詰めても出費するのは当然である	.610	.781

	固有値	分散の％
第一主成分	1.674	55.8
第二主成分	.716	23.9
第三主成分	.610	20.3

（注）因子抽出法：主成分分析，N=793, Cronbach's α =.603

表6.「15歳時の家庭の文化・教育環境」の尺度構成（男性）

変数	共通性	因子負荷量
保有していた財（15歳時）子ども部屋	.536	.732
保有していた財（15歳時）あなた自身の学習机	.510	.714
保有していた財（15歳時）ピアノ	.271	.520
保有していた財（15歳時）文学全集・図鑑	.479	.692
保有していた財（15歳時）美術品・骨董品	.216	.465

	固有値	分散の％
第一主成分	2.012	40.2
第二主成分	.914	18.3
第三主成分	.869	17.4
第四主成分	.677	13.5
第五主成分	.528	10.6

（注）因子抽出法：主成分分析，N=658, Cronbach's α =.624

表７．「15歳時の家庭の文化・教育環境」の尺度構成（女性）

変数	共通性	因子負荷量
保有していた財（15歳時）子ども部屋	.704	.739
保有していた財（15歳時）あなた自身の学習机	.733	.704
保有していた財（15歳時）ピアノ	.405	.580
保有していた財（15歳時）文学全集・図鑑	.569	.722
保有していた財（15歳時）美術品・骨董品	.712	.467

	固有値	分散の％
第一主成分	2.119	42.4
第二主成分	1.005	20.1
第三主成分	.790	15.8
第四主成分	.614	12.3
第五主成分	.472	9.4

（注）因子抽出法：主成分分析，N=793, Cronbach's α =.651

表 8．「格差容認意識」の尺度構成（男性）

変数	共通性	因子負荷量
チャンスが平等に与えられるなら、競争で貧富の差がついても仕方ない（反転）	.384	.620
競争の自由よりも、格差をなくすことが大切	.613	.783
今後、格差が広がってもかまわない（反転）	.574	.757
今の日本では収入の格差が大きすぎる	.389	.624

	固有値	分散の％
第一主成分	1.960	49.0
第二主成分	.861	21.5
第三主成分	.654	16.3
第四主成分	.525	13.1

（注）因子抽出法：主成分分析，N=658, Cronbach's α =.648

表 9．「格差容認意識」の尺度構成（女性）

変数	共通性	因子負荷量
チャンスが平等に与えられるなら、競争で貧富の差がついても仕方ない（反転）	.421	.649
競争の自由よりも、格差をなくすことが大切	.564	.751
今後、格差が広がってもかまわない（反転）	.508	.713
今の日本では収入の格差が大きすぎる	.186	.431

	固有値	分散の％
第一主成分	1.679	42.0
第二主成分	.947	23.7
第三主成分	.746	13.7
第四主成分	.627	15.7

（注）因子抽出法：主成分分析，N=793, Cronbach's α =.514

〈引用文献〉

相澤真一，2008,「進学期待・進学行動の関連と社会的規定要因の継時的変化――ジェンダー間の差異を手がかりに」中村高康（編）『2005年SSM調査シリーズ 6　階層社会の中の教育現象』2005年SSM調査研究会：1 -19.

荒牧草平, 2011,「高校生の教育期待形成における文化資本と親の期待の効果――『文化資本』概念解体の提案」『九州大学大学院教育学研究紀要』57（14）：97-110.

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦（編），2000,『高校生文化と進路形成の変容』学事出版.

藤原翔，2009,「現代高校生と母親の教育期待――相互依存モデルを用いた親子同時分析」『理論と方法』24（2）：283-99.

本田（沖津）由紀，1998,「教育意識の規定要因と効果」苅谷剛彦（編）『1995年SSM調査シリーズ11：教育と職業――構造と意識の分析』1995年SSM調査研究会：179-97.

片岡栄美，1997,「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』 9：23-38.

――――，2009,「格差社会と小・中学受験――受験を通じた社会的閉鎖，リスク回避，異質な他者への寛容性」『家族社会学研究』21（1）：30-44.

片瀬一男，2005,『夢の行方――高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会.

片瀬一男・土場学，1994,「現代家族における教育アスピレーションの加熱と冷却――教育は家族内部にどのように浸透しているか」『社会学研究』61：41-66.

吉川徹，2000,「大衆教育社会のなかの階層意識」近藤博之（編）『日本の階層システム 3：戦後日本の教育社会』東京大学出版会：175-95.

――――，2006,「学歴と格差・不平等――成熟する日本型学歴社会」東京大学出版会.

――――，2014,『現代日本の「社会の心」――計量社会意識論』有斐閣.

宮寺晃夫，2006,『教育の分配論――公正な能力開発とは何か』勁草書房.

三輪哲・苫米地なつ帆，2011,「社会化と教育アスピレーション」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』60(1)：1-13.
中井美樹，1991,「社会階層と親の価値期待」『現代社会学研究』4：34-57.
中村高康，2000,「高学歴志向の趨勢――世代の変化に注目して」近藤博之（編）『日本の階層システム3：戦後日本の教育社会』東京大学出版会：151-73.
中山慶子・小島秀夫，1979,「教育アスピレーションと職業アスピレーション」富永健一（編）『日本の階層構造』東京大学出版会：293-328.
直井道子，2002,「職業移動論・老年学と家族論の接点」石原邦雄（編）『家族と職業』ミネルヴァ書房：87-106.
尾嶋史章（編），2001,『現代高校生の計量社会学――進路・生活・世代』ミネルヴァ書房.
Sewell,W.H., A.O. Haller, and G.W. Ohlendorf, 1970, "The Educational and Early Occupational Status Attainment Process: Replication and Revision," *American Sociological Review*, 35(6), 1014-27.
柴野昌山・前田耕司・天童睦子・飯嶋香織，1999,「社会階層と教育期待に関する実証的研究――家族の変化との関連で」『早稲田教育評論』13(1)：97-133.

Gender Differences in Determinants of Parents' Educational Aspirations

KINNAN Saki

〈Abstract〉

Previous studies in Japan have revealed that parents' educational aspirations are related to their socioeconomic status, and have an important influence on children's educational achievement and eventual social status. However, few studies in Japan have examined whether gender differences are seen in the determinants of parents' educational aspirations. This paper aims to explore this, so as to explain some of the reasons for an emergence of a class structure in children's educational achievements.

By analyzing data from a survey conducted in 2010 by the Stratification and Social Psychology Project (SSP Project) and employing multiple regression analysis, the following findings were revealed. On the one hand, men's educational aspirations for children are largely determined by their own age and years of education; that is to say, attributive variables. On the other hand, women's educational aspirations are strongly affected by the association between social attitudes and social class, which is an affirmative orientation to a stratified society. Moreover, privileged cultural and educational home environments at 15 years old also positively affect women's educational aspirations for children.

The gender differences revealed in this study can be explained by differences between men and women in terms of 1) their positions in the labor market, 2) their roles in conveying various values to children during child-rearing, and 3) the meaning of children's educational achievements to parents' own identity or quality of life.